

看護臨床実習前後の行動特性と性格特性の変化

河村 一海 西村真実子 永川 宅和

KEY WORDS

Behavioral Characteristic, Personal Characteristic, Jenkins Activity Survey, Type A Behavior Pattern, Clinical Nursing Seminar

はじめに

看護臨床実習の目的として専門の知識の応用, コミュニケーション技術の習得, ハンドケアの熟練, 看護婦としての望ましい態度の育成という四つの分野での研究がすすめられているが, 態度の育成についての研究報告はまだ少ない。しかし学生は実習を通して看護婦として望まれる行動を身につけていき, その行動が卒業後看護婦として勤務していく中で性格に何らかの影響を与えていくことが予測されることからこの分野における研究は重要である。

そこで今回, 臨床実習による態度の育成という観点から, 実習後の看護学生にどのような行動変容がおこり, それによって性格特性がどう影響をうけたかを検討した。

用語の定義

・行動特性

人がある環境におかれたときに表面にみえてくるもののことで, その人のふるまい方を示す。

・性格特性

どのようにふるまうかよりもむしろ動機や意図, 思考パターンを示す。

性格特性そのものは簡単には変化しないが行動特性の変化によって, のちの性格特性は影響をうけるものと考えた。

研究方法

1. 対象

K大学医療技術短大看護学科学生78名(全員女性)であり, 年齢は20~21才であった。

2. 調査内容

学生の行動特性の測定には, Jenkins Activity Survey (Student Version) の同志社大学心理学研究室翻訳版(以下JAS)を使用, 性格特性の測定には金井らがM-Gテスト(本明・ギルフォード性格検査, 数研式)の性格特性を参考に作成した性格の自己評価質問紙(以下MG変法)を使用し¹⁾, 得点の実習前後の変化をみた。

JASはA B尺度, H尺度, S尺度の3つの尺度により, A型行動パターン(以下タイプA)の有無を判別する質問紙である。A B尺度は特に活動性や衝動性を測定, H尺度は精力的あるいは競争的な行動特性を測定, S尺度は行動の速さや気短さを測定する。

MG変法はM-Gテストを参考にした12の性格特性(活発さ, 指導性, 社交性, 協調性, 攻撃性, 判断傾向, 気楽さ, 思考性, 神経質傾向, 抑うつ性, 劣等感情, 情緒の安定)について, それらの性格の傾向を4段階評価で返答する質問紙である。今回は学生にとって好ましい性格特性を高得点としたので, 攻撃性では非攻撃的を, 神経質傾向では神経質でないを, 抑うつ性では陽気を, 劣等感情では劣等感情なしを高得点とした。

また実習前後の行動特性, 性格特性の得点の変化の関連要因と考えられた実習成績や, 実習ローテーションとの関係についても検討した。

3. 方法

1) 調査時期

3年時の約10ヵ月間の各論看護臨床実習前後, つまり実習前を平成4年11~12月とし, 実習後を平成

表1 JAS各尺度の得点の実習前後の比較

	実習前	実習後	t 値
AB尺度	4.2±2.4	5.7±2.4	6.23***
H尺度	8.6±4.5	9.7±4.5	2.51*
S尺度	13.9±5.1	14.6±5.3	1.55

*p<.05 ***p<.001

表2 MG変法の性格特性得点の実習前後の比較

	実習前	実習後	t 値
活発さ	2.5±0.7	2.7±0.8	0.34*
指導性	2.3±0.8	2.4±0.6	0.78
社交性	2.7±0.7	2.7±0.7	0.52
協調性	3.0±0.7	3.2±0.7	2.20*
攻撃性	2.8±0.8	2.7±0.8	-1.46
判断傾向	2.5±0.6	2.6±0.6	1.00
気楽さ	2.8±0.8	2.8±0.8	-0.18
思考性	2.8±0.7	2.7±0.7	-0.80
神経質傾向	2.5±0.9	2.5±0.8	0.00
抑うつ性	2.7±0.6	3.0±0.7	2.56*
劣等感情	2.2±0.8	2.4±0.7	1.23
情緒の安定	2.7±0.8	2.8±0.8	1.43

*p<.05

5年12月として調査を行った。

2) 実施方法

調査は記名自記式、配布留め置き法で行った。その際調査結果は今回の研究以外に使用しないこと、強制回収はしないことを学生に約束した。

3) 分析方法

実習前後のJAS各尺度、MG変法各性格特性の得点の比較にはt検定を用いた。また実習成績や、実習ローテーションとの関係については二元配置分散分析を用いて検討し、危険率5%以下を有意差ありとした。

結果

1. 調査の回収率

調査用紙の回収率は実習前が89.7%、実習後が96.0%だったが、回収したものの中で前後の比較ができる対象数は63名(80.8%)だった。

2. JAS各尺度の得点の変化

表1はJASのAB尺度、H尺度、S尺度の実習前後の平均得点と標準偏差を示したものである。どの尺度においても実習前と比べ実習後の得点が高くなっており、AB尺度の平均得点が4.2点から5.2点に、H尺度が8.5点から9.7点と実習前後の得点に有意差を認めた。すなわち、AB尺度でみている活動性や衝動性が、またH尺度でみている精力的、行動的な

表3 実習成績と実習前後の性格特性(協調性)の関係(二元配置分散分析)

	自由度	平方和	平均平方和	F	p
実習成績	1	4.629	4.629	7.584	0.0077
実習前後	1	1.341	1.341	4.769	0.0328
交互作用	1	0.002	0.002	0.006	0.9404
個人差	61	17.157	0.281		

表4 実習成績と実習前後の性格特性(協調性)の得点

	実習前	実習後
成績上位群	3.1±0.6	3.3±0.6
成績下位群	2.8±0.8	3.0±0.7

行動特性が実習前に比べて実習後に高い傾向にあった。

3. MG変法各性格特性の得点の変化

表2はMG変法各性格特性の実習前後の平均得点と標準偏差を示したものである。実習前に比べ実習後の平均得点が、活発さでは2.5点から2.7点と、協調性では3.0点から3.2点と、抑うつ性では2.7点から3.0点と有意に高くなっていった。指導性、社交性、判断傾向、劣等感情、情緒の安定の得点も実習前より後に高くなっていったが、有意差はみられなかった。

4. 実習成績との関係

表3は実習前後の性格特性すなわちMG変法の協調性の得点と実習成績(上位群、下位群別)の関係を二元配置分散分析でみた結果である。成績上下位群別の実習前後の得点に差があったのはMG変法の協調性のみで、その他のMG変法の各性格特性やJASでは有意差がみられなかった。

表4は実習成績上下位群別の実習前後の協調性の得点である。実習前後の得点の変化が成績上位群では3.1±0.6点から3.3±0.6点と、成績下位群では2.8±0.8点から3.0±0.7点となっており、両群とも実習前に比べ実習後に得点が上がっていたが、前後とも上位群の得点が高く、望ましい性格特性を示していた。

5. 実習ローテーションとの関係

実習後の行動特性、性格特性の得点を最初に実習した分野によって差がないか検討したが、得点の有意差は認められなかった。

考察

今回の結果をみると、全体として学生が1年間の看護臨床実習を経験することで、いくらかの行動特性の変化がおり、性格特性も影響をうけるという

ことが示唆された。

今回行動特性の変化をみるために用いた JAS は、本来は冠動脈疾患のリスクファクターとしての行動パターン (タイプ A) や冠動脈疾患の発生メカニズムを研究しようとする目的で作成されたものである。しかしタイプ A が野心家や競争心が強い人や、きまじめで几帳面な人、または職業的特徴として管理職に多いということから最近ではむしろ労働ストレス²⁾や職務との関係³⁾をみるための研究に用いられるようになってきている。今回の結果で、行動として身についた活発さ、精力的、きまじめさ、几帳面さは看護職の職業適性からも大切なものではないかと考えられ、実習体験によってこれらの行動特性が学生に少なからずも備わったことが推察できる。しかし、一方ではこのような看護職に望まれる行動特性がタイプ A の特徴でもあり、タイプ A はストレスと密接に関係していることから、看護職に望まれる行動特性がストレスをうけやすい行動特性であることは注意すべきである。実習指導者として学生のストレスについても注意していくようにしなければならない。

次に性格特性について考察すると、性格というのは遺伝と環境から作られるといわれており、親の養育態度や成長に伴う社会環境の変化、その人を取りまく人間環境の中で培われてくるものである。したがって、そのような性格特性が青年後期にあたる学生のたった 1 年間の実習体験によって影響をうけることは予測しがたい。しかし、一方で行動修正のための治療法として行動を変えるように働きかけることが性格にも影響するという報告もあり⁴⁾、今回の結果もこのような性質をもつ影響力ではなかったかと考えられる。

また、実習後の調査時期が今回は実習終了直後だったために、実習の影響が強く、行動特性、性格特性に差があったとも考えられる。実習によって備わった特性の継続性の検討も必要であろう。

実習成績上下位群で学生の協調性の変化に差がみ

られたことについては、今回の対象では実習前後の得点差が少ないことから、対象を変えて再検討してみる必要もある。

また、今回は行動特性や性格特性に影響を及ぼすような実習以外の要因の影響については考慮していない。この時期の学生はアルバイトや異性関係など学業以外にも行動特性に影響を及ぼす要因が考えられる。今後は、行動特性、性格特性の継続性、行動特性、性格特性の変化と臨床実習の方法やその他の要因との関係などについても検討していきたい。

まとめ

1. 看護学生の行動特性について JAS による実習前後の比較をしたところ、実習後では実習前と比べて活発で精力的な行動をとるようになっていた。
2. 看護学生の性格特性について MG 変法による実習前後の比較をしたところ、実習後では活動的、協調的、陽気となり、実習前と比べて看護者の適性としてより望ましい性格となっていた。
3. 実習成績と実習後の行動特性、性格特性を検討すると、成績上位群の方が協調性の得点が高く、望ましい性格特性を示していた。

以上より、臨床実習による学生の行動特性、性格特性への影響が示唆され、このような観点からみた学生教育は重要ではないかと考えられた。

文献

- 1) 河村一海 他：看護学生の行動特性と性格特性の関連について。金大医短紀要, Vol. 17: 181-186, 1993.
- 2) 福西勇夫 他：労働ストレスとタイプ A 行動パターン：総合健診システムにおける解析結果より。タイプ A, Vol. 3, No. 1: 79-82, 1992.
- 3) 古井 景 他：タイプ A 行動パターンと職務との関連—JAS スコアを用いて。タイプ A, Vol. 3, No. 1: 74-78, 1992.
- 4) 日野原重明 他：新しい治療法としての行動医学。第 1 版: 59-73, 1981.

The Change of Behavioral Characteristics and Personal Characteristics before and after Clinical Nursing Seminar

Kazumi Kawamura, Mamiko Nishimura, Takukazu Nagakawa